

フランス知識人の「反ファシズム」イデオロギー —— 戦間期反戦運動および対独レジスタンス運動との関連において ——

細 川 真 由

1. はじめに

(1) 本稿の概要

1914年に勃発した第一次世界大戦は、人類にとって未曾有の世界戦争であった。ヨーロッパをはじめとする世界各地が戦場となり、多数の死傷者を出した。また、第一次世界大戦は国家が政治・経済・文化などあらゆる分野を統制下に置き、あらゆる国民が動員される「総力戦」であったことも、それまでの戦争とは異なっていた。

大戦終結後、国際社会では二度と大戦争の惨禍を繰り返さないために様々な国際法制度が設けられた。その一つとして、国際連盟による平和的紛争解決制度を挙げることが出来る。しかし、その一方でドイツ・イタリアではファシズム体制が誕生し、ヨーロッパの脅威となっていた。国際社会における平和の取り組みの甲斐なく、第一次世界大戦終結の約20年後には再び2度目の世界戦争、第二次世界大戦が勃発してしまった。

この20年の間には、一般市民のレベルでも国際平和を創造するための取り組みが行われてきた。その中心になったのは「知識人」と呼ばれる人々である。特にフランスでは、知識人による反戦運動が盛んにおこなわれた。フランスの知識人たちは、ナチス・ドイツの反民主主義・反自由主義・反平和主義的イデオロギーに危機感を覚えていた。またこの頃、フランス国内においても、世界恐慌をはじめ、政治・外交・経済・社会面における様々な問題が浮上し、ファシストや右翼勢力が台頭しつつあった。彼らは、ナチズムのもとに反政府勢力の弾圧が広く行われ、学問・思想の自由の剥奪、人権と文化に対する侵害が大規模に行われているドイツの状況に注目し、また自国でも同様の状況が起こることを恐れながら、文化や人権の保護と戦争阻止とを結び付けて考えるようになったのである。

第二次世界大戦が勃発すると、フランスの知識人の中にレジスタンス運動に参加する者が現れた。大戦が開始してすぐの頃は、フランスとドイツの間に本格的な戦闘が存在しなかった（「奇妙な戦争」）が、翌年5月になるとドイツは圧倒的な軍力でフランスを制した。6月14日、無防備都市を宣言したパリにドイツ軍が入城し、その2日後にペタン（Philippe Pétain）内閣が成立した。このペタン内閣により仏独休戦協定が調印され、フランス政府はフランス中部のヴィシーへ移動した。これが「ヴィシー政権」の始まりであった。ヴィシー政権はナチス・ドイツの傀儡政権であったが、一方で独裁政党によるファシズム政権でもなく、実態は非常に曖昧であっ

た。しかし、大統領職や議会制度は廃止され、政府、特に国家主席に就任したペタンによる権威主義的体制が敷かれた。第二次世界大戦期におけるレジスタンス運動とは、様々な立場の人々による、このヴィシー政権およびその背後にいるドイツへの抵抗 (la Résistance) を意味する¹⁾。

本稿は、戦間期反ファシズム運動および第二次世界大戦期のレジスタンス運動を、フランス知識人による国際平和のための一貫した試みとして捉えることを目的とする。これらの2つの運動の連続性・類似性に関しては、従来あまり研究がなされてこなかったが、本稿では運動に参加した知識人の平和に関する思想や精神に焦点を当てた上で2つの運動の一貫性について検討を行う。

本稿では、まずフランス知識人による戦間期の国際反戦・反ファシズム運動について概観した上で、これらの運動に参加した知識人の平和観を検討する。続いて、第二次世界大戦期レジスタンス運動に関わった知識人を比較し、レジスタンスに参加した知識人の平和観とは如何なるものであったのかを明らかにする。最後に、戦間期の運動と第二次世界大戦中の運動との類似性を詳細に検討する。

(2) 「知識人」の定義

さて本論に入る前に、「知識人」とは何かという定義について検討しておきたい。「知識人 (intellectuel)」という語が用いられるようになったのは、1894年のドレフュス事件がきっかけであったとされている。これはユダヤ人大尉ドレフュス (Alfred Dreyfus) がドイツのスパイの嫌疑をかけられ、証拠不十分のまま軍法会議で終身刑を宣告されたという事件であった。その際、作家エミール・ゾラ (Emile François Zola) がドレフュスの再審を求めて「我弾劾す (J'accuse)」を発表し、それに賛同した人々による署名が「知識人の抗議文」と呼ばれたことから、「知識人」という呼称が生まれた。

その後、「知識人」の定義をめぐる議論が様々に展開されてきた。中でも、ジュリアン・バンダ (Julien Benda) は、知識人とは本来政治とは無関係で、「その活動が実際目的を追求するのではなく、〔中略〕非世俗的な財の所有に喜びを求め」²⁾るものであるにもかかわらず、「国家に係わることで偉大になれると信ずる」³⁾現代知識人の状況を「知識人の裏切り」と呼んだ。しかし、サルトル (Jean-Paul Sartre) は、作家が何かを語ることにあるいは語らないことはすべて政治的・社会的な意味を持っているのであり、作家をはじめとする知識人はその性質上社会参加 (アンガジュマン engagement) を避けられないと指摘した⁴⁾。近年では、サイード (Edward Wadie Said) が、知識人とは「公衆に向けて、あるいは公衆になりかわって、メッセージなり、思想なり、姿勢なり、哲学なり、意見なりを、表象＝代弁し肉付けし明晰に言語化できる能力にめぐまれた個人」⁵⁾であり、「安易な公式見解や既成の紋切り型表現をこぼむ人間であり、なかなか権力の側にある者や伝統の側にある者が語ったり、おこなったりしていることを検証もなしに無条件に追認することに対し、どこまでも批判を投げかける人間」⁶⁾と定義している。確かに、知識人とは自らの世界に「とじこまる」性質をもつ人々であって一般社会と距離を縮めることは難しいと考えられるのかも知れないが⁷⁾、いつの時代も知識人がその作品・行動によって社会に

影響を与えてきた存在であることは決して否定できない。

以上をふまえて本稿では、「知識人」を、文学・芸術・学問など自らの専門知識を用いて発言・行動することにより、普遍的価値を擁護し社会的問題の解決を図ろうとする一般市民として捉えるものとする。

2. 知識人による戦間期国際反戦運動

まず、戦間期にフランスをはじめとする世界の知識人が展開した反戦・反ファシズム運動について取り上げる。フランス知識人の間では、デカルト以来「個」を守る伝統が強く根付いていたが、個人主義的な彼らが反戦運動において団結を図ったのは、マルクス主義のイデオロギー、およびそのイデオロギーを実現するために創られた共産党、そして共産党に指導されて誕生した世界初の社会主義国家・ソビエト連邦の影響によるものであった⁸⁾。ゆえに、フランス知識人による反ファシズム平和運動は、社会主義のイデオロギーと密接な関連を有していたのである。また、彼らの運動は、フランス左翼結集、ひいては1935年の人民戦線結成に関して重要な役割を果たすこととなった。

(1) 知識人の平和運動・組織

革命作家芸術家協会 (AEAR)

戦間期国際反戦運動の嚆矢として、革命作家芸術家協会 (AEAR) の結成を挙げることが出来る。AEARは、プロレタリア文学の国際的組織であった国際革命作家同盟 (UTER) のフランス支部として1932年3月に設立された。そのためAEARは共産主義イデオロギーと密接な関連を有しており、内実的には共産党に同化した組織であった。一部の知識人はAEARに対して好意を示さなかった。AEARへの参加は共産党への服従を意味していたためである。そのため、プロレタリア文学に属する作品を創造しながらも共産党への参加は拒否する作家たちも存在していた⁹⁾。

しかし、1932年12月、作家アンリ・バルビュス (Henri Barbusse) らの署名により、反戦・反ファシズム共同戦線への知識人の結集が求められたのを契機として、AEARには多数の知識人が参加した。参加した者の中には、ルイ・アラゴン (Louis Aragon)、アンドレ・ブルトン (André Breton)、ロマン・ロラン (Romain Rolland)、アンドレ・マルロー (André Malraux) など著名な作家たちがいた。AEARは機関誌『コミューヌ (Commune)』を創刊し、フランスでのプロレタリア文学の発展に寄与した。メンバーは共産党員が多かったものの、AEARはイデオロギー面については非常に寛容で、政治的立場を問わず広範な知識人の参加を求めた。しかし「異端」の社会主義者に対しては強い排撃姿勢をとっていた¹⁰⁾。

アムステルダム＝ブレイエル運動と反ファシズム共同戦線

AEARと同時並行するように、1932年8月27日から31日までの5日間、オランダ・アムス

テルダムで第1回国際反戦大会が開催された。また翌年6月にはパリ・プレイエル会館で第2回大会が開催された。この2つの大会の開催による国際的な反戦運動は「アムステルダム＝プレイエル運動」と称される。

この運動を主催したのはロマン・ロラン、アンリ・バルビュス、アンドレ・マルローら AEAR にも参加していた知識人である。彼らは全世界の平和団体や労働団体、著名な知識人などに広く参加を呼び掛けた。日本からも片山潜が参加した。ロランは「思想的、社会的、組合などの政党、労働者団体、その他の団体の差別をこえて、団結することを」訴えるアピールを発した¹¹⁾。しかし、各国の社会党は大会への参加を禁じられていた。フランス社会党の機関紙『ポピュレール (Le Populaire)』はこの大会を「喜劇」として嘲笑し、第二インターナショナル（労働社会主義インターナショナル）の幹部であるフリードリヒ・アードラー (Friedrich Adler) も大会を厳しく批判した。

第1回大会には29か国、約2200名の代表が参集した。その中にはフランス社会党の反対を押し切って参加する者もあり、共産党員と社会党員が同席するというフランスでは珍しい光景が見られた¹²⁾。バルビュスは開会演説において「討論はセクト主義をはなれて、帝国主義戦争反対の闘争という根本思想でみちびかれてゆこう」と述べ、共産党から独立した平和運動を追求することを宣言した。超党派的な平和主義を掲げる共同戦線の形成を目指したのが、この大会の最大の特徴であった。しかし実際には、大会に参加した知識人たちはソ連の「組織的な平和政策」に希望を見出しており、共産主義と完全に隔離されることはなかったのである。

一方で、第1回大会と第2回大会の間の時期に「反ファシズム共同戦線」が結成された。急進社会党の代議士であったガストン・ベルジュリ (Gaston Bergerie) が提唱し、コレージュ・ド・フランスの物理学教授で共産党シンパのポール・ランジュヴァン (Paul Langevin) ら知識人も参加した。この共同戦線では、共産主義社会の建設を将来の目標とすること、および反ファシズム闘争へ全力を注ぐことが宣言された。彼らはアムステルダム＝プレイエル運動のイニシアチブが共産党系の人々によって握られていることに不満を抱いていたが、共産党や社会党の協力を得ずにはいられなかった。

反ファシズム知識人監視委員会

アムステルダム＝プレイエル運動の後、1934年にフランスで反ファシズム知識人監視委員会 (CVIA) が結成された。この年の2月6日の右翼勢力による騒擾事件の直後から、一般の青年ピエール・ジェローム (Pierre Jérôme) が中心となって活動した。委員会に加盟した学者・作家は1935年半ばには約8000名に上った。この委員会の主なリーダーとなったのは、社会党員でトロカデロ博物館教授のポール・リヴェ (Paul Rivet)、反ファシズム共同戦線にも参加したポール・ランジュヴァン、急進社会党系の哲学者アラン (Alain) らであった¹³⁾。ここから、共産党・社会党・急進社会党系の知識人が党派を超えて結集していたことが読み取れる。

また、CVIAは組織の綱領的存在である「労働者への宣言」に基づいて諸活動を展開した。こ

これらの活動によって、人民戦線の先駆けとなる形態、いわば「人民戦線という言葉が生れる前の人民戦線」を創り出したのである¹⁴⁾。

文化擁護国際作家大会

1935年6月、パリのミュチュアリテ会館で「文化擁護のための国際作家大会」が開催された。この大会を主催したのはアンドレ・ジッド (André Gide)、ロマン・ロラン、アンリ・バルビュス、アンドレ・マルローらフランスの作家である。この面々から読み取れるように、国際作家大会の中心的役割はAEARによって担われていた。先述したように、AEARに加盟していた左派系の作家たちは、ナチス・ドイツの状況を見て文化や人権の保護と戦争阻止とを結び付けて考えるようになっていた。そのため、世界の作家・芸術家・学者に呼びかけて国際平和のために協力することを求めたのである。

大会は5日間に渡って開催された。議論のテーマは「文化遺産」「社会における作家の役割」「個人」「ユマニズム」「民族と文化」「創造の問題と思想の尊厳」「文化の擁護」の7つである。文学の成立にあたっての条件から文学と政治の関係に至るまで、多種多様な議題が提示された。特に、作家たちの大会において「民族」について議論されたのは非常に画期的と言える。「民族と文化」のテーマには大会期間全5日間で1日以上という長い時間が割かれており、当時の作家たちにとって、ナチス・ドイツの反ユダヤ主義が如何に大きな脅威となっていたかが読み取れる¹⁵⁾。この大会は、戦間期における知識人の反ファシズム諸団体および諸運動の総決算ともいえるべき成果を残したとされている。

(2) 戦間期フランス知識人の「反ファシズム」思想

これらの戦間期反戦運動に共通している事柄として、知識人たちの行動の基礎となったのは共産主義イデオロギーであり、戦間期の反ファシズム運動における「反戦」とは帝国主義戦争への反対を示すものであったということを指摘できる。しかし、共産主義をベースとした運動や大会に、何故社会党や急進社会党などの左派の人々が結集することが出来たのだろうか。その要因の一つとして、コミンテルンの戦略転換が挙げられる。1935年のコミンテルン第7回大会において、反ファシズム人民戦線戦術が採択された。これにより、世界の共産主義運動は資本主義を打倒するための世界革命ではなく、平和や民主主義を擁護する反ファシズム運動を当面の最大の課題とした。これは、「生存圏」を獲得するためにソ連に侵攻することを企図するナチス・ドイツの対外政策を最大の危険とみなし、ドイツ以外の周辺諸国に接近し友好を図るというソ連の外交路線に過ぎなかった¹⁶⁾。だが、共産主義運動がその特徴である階級闘争論を前面に押し出すことを止めたことにより、フランスでは共産党・社会党・急進社会党の協力が進んだと考えられる。また、敵の範囲を限定して出来るだけ広範な立場を味方に引き入れるという点において、ソ連の反ナチス・ドイツ外交戦線と人民戦線結成は類似していた。

しかし、フランスにおいて左派知識人が広く結集し得たのは、ソ連の外交政策の影響だけでは

説明できないだろう。戦間期の反戦運動・大会のすべてに共通しているのは、当然ながら「反ファシズム」という点であるが、この「反ファシズム」とはいかなるものだったのだろうか。そして、特にフランスで、特に知識人という集団がファシズムに強く反応し、行動を起こしたのは何故だったのだろうか。

戦間期の反戦運動のイニシアチブをとったアンドレ・マルローは、「反ファシズムは〔中略〕一つの感情、一つの態度、そしてまた一つの政策でもある」¹⁷⁾と述べている。ここから、「反ファシズム」が単なるファシズムの否定という消極的な意味を持つものでも、共産主義というイデオロギーの一形態でもなく、それ自体独立した一つのイデオロギーであると考えられる。この「反ファシズム」イデオロギーは、ファシズムへの対抗と、反帝国主義および社会主義的ユマニズムが統合されたものであった¹⁸⁾。

では、なぜフランスの知識人たちが「反ファシズム」イデオロギーの下に結集したのだろうか。それは先述したように、彼らがナチス・ドイツによる恣意的な文化の統制に危機感を抱いていたからである。単に他国でそのような事態が起きているというだけではそれほど危機感も生まれなかっただろうが、フランス国内でも右翼勢力（愛国青年団、フェーソー運動、クロワ・ド・フー、アクション・フランセーズなど）が1920年代から台頭し、30年代にはその中からファシスト勢力が誕生していた¹⁹⁾。そのため、フランスにとってファシスト政権の誕生とそれに伴う文化・思想の抑制は対岸の火事ではなかったのである。加えて、ナチス・ドイツの「生存圏」獲得のための侵略的な外交方針は、二度目の世界戦争を招くことを想像させるものであった。こうして、知識人の間で、自らの職分である表現・思想の自由を守ることと、ファシズムへの対抗そして国際平和の維持とが密接に結びついて、表現・思想の自由や文化の擁護が「反ファシズム」という平和主義的イデオロギーの中核に据えられたと考えられる。それゆえに多くの知識人が「反ファシズム」に共感し協力することが可能だったのではないだろうか。

次章では、この「反ファシズム」というイデオロギーが第二次世界大戦期のレジスタンス運動においてどのように継承されたのかについて考察する。

3. 第二次世界大戦期レジスタンス運動における知識人

1940年6月の休戦協定により、フランスの武装解除と本土の分割、および150万人の捕虜をドイツに残すことが規定された。フランス本土は、北部占領地区・南部自由地区・北東のドイツ併合地区（アルザス・ロレーヌ地方）の3つに分割され、南北間での自由な往来を行うことは禁じられた。一方で、フランス政府の権限は、協定締結以前と同様にフランスのすべての領土に及び、また陸軍・海軍兵力を保有することも許され、ヴィシー政府は国家としての主権を剥奪されることはなかった。しかし、北部占領地区ではドイツ占領軍による軍政が敷かれ、南部自由地区でも政府は占領軍の圧力を拒むことが出来なかった²⁰⁾。

フィリップ・ペタン元帥は、第一次世界大戦中の1916年、ヴェルダン戦の戦いでフランスに勝

利をもたらした英雄として知られていた。1940年ドイツに対する敗戦で茫然自失したフランス国民は、過去の栄光を象徴するペタン元帥に希望を見出したのである。こうして成立したヴィシー政権は、敗戦の責任は第三共和制にあると考えていた。従前の政治制度がもたらしたフランス人の精神的墮落と道徳的脆弱を一掃して、ドイツとの協力のもとにフランスの社会改造を行う必要があると主張した。そこでペタンは「自由・平等・友愛」に替えて「労働・家族・祖国」という全体主義スローガンを掲げて「国民革命」を目指したのである。

一般市民の生活も変化した。例えば、北部占領地区のパリでは、一般市民は以前とほとんど同様の生活を送ることが出来たが、ドイツ語の標識、公共の建造物に掲げられたハーケンクロイツ旗、ドイツ兵専用の施設などが、ドイツ軍による占領の事実を物語っていた。また、市民は次第に厳しい物資不足にも見舞われ始めた。1940年7月以降は配給制が実施されたが、次第に配給量は減少し、市民は一層困窮した²¹⁾。当時のパリの様子について、哲学者サルトル (Jean-Paul Sartre) は次のように表現している。

断じてドイツ人は武器を手にして街を歩き回っていたわけではない。断じてかれらは市民に自分らを先にせよとか、自分らの前では歩道をよけよといった強要はしなかった。〔中略〕また、フランス人がなにかこう手ひどい軽蔑のまなざしを向けたなどということも考えないでいただきたい。なるほど、民衆の大半はドイツ軍隊といっさい接触することを差し控えはしたが、占領が毎日のことであった点を忘れてはならない²²⁾。

確かに、ドイツ軍のパリ占領は多くの市民にとって「日常」となりつつあったが、この事態が「異常」であることに間違いはなかった。ドイツ軍が迫る前に多くの知識人が亡命する中、フランス国内にとどまった知識人は対独協力 (コラボラシオン) を行う者と、この「異常」に立ち向かうためにレジスタンスに参加する者に分かれた。レジスタンスに参加した者の中には戦間期の国際反戦運動に参加していた知識人も多かった。また、国外のレジスタンス組織に参加する知識人もいた。

初期のレジスタンスは、休戦協定を締結したヴィシー政権に反抗し対独戦続行を訴えるという性格が強かった。しかし、戦間期には平和を訴えていた知識人たちが、戦争を続行するよう主張したというところには矛盾が感じられる。知識人にとって、戦間期の平和運動とレジスタンス運動との間にはどのような連続性があったのだろうか。

本章では、レジスタンス運動に参加した知識人の中から2人を取り上げ、彼らがどのような「反ファシズム」思想を持っていたのかを検討する。1人は自らの表現手段としての文学作品を民衆に広めることで対独レジスタンスを行った作家ヴェルコール (Vercors)、そしてもう1人は国外レジスタンス組織「自由フランス」の法務・公共教育委員として活躍したルネ・カサン (René Cassin) である。

(2) 文学によるレジスタンス：ヴェルコール

占領下フランスの文学界

特定のレジスタンス組織に参加するのではなく、自らの表現手段を以てレジスタンスを行う作家・芸術家が存在した。特に文学はレジスタンスの一手段として大きな貢献を果たした。

ヴィシー時代には、ドイツによって反独的書物やユダヤ人の出版物に対する厳しい検閲が行われていた。さらに第二次世界大戦中はあらゆる物資が不足し、紙やインクも配給制となった。ドイツは紙の配給をコントロールすることにより、フランスの出版界すなわち思想界をも規制の対象としたのである²³⁾。そのため、文学界では対独協力路線を歩む作家たちが多く見られた。例えば、『新フランス評論 (NRF)』は国際的に著名な文学雑誌であり、フランスの三大権力の一つ²⁴⁾とも言われたが、出版社の意向で対独協力派作家の作品が主に掲載されるようになった。

しかし、そのような状況にもかかわらず、ヴィシー政権期の4年間には多くの反独地下出版物が発行された。それらの中にはレジスタンス組織や政党によるものに限らず、知識人や芸術家による文学作品も多くみられる。例えば、共産党員ジャック・ドクール (Jacques Decour) とジョルジュ・ポリツェル (Georges Politzer) により作られた『自由思想』は、その後『フランス文芸』と改称し、サルトルやアラゴンら著名な知識人の協力を得ている²⁵⁾。また、著名なレジスタンス文学として、ヴェルコールらによって創設された『深夜叢書』がある。本節では、この深夜叢書に焦点を当て、文筆活動によるレジスタンスが社会に与えた影響について検討する。

戦間期のヴェルコール

ヴェルコール (本名ジャン・ブリュレル Jean Bruller) は、1902年パリに生まれ、戦間期には若手グラフィックデザイナーとして働いていた。第一次世界大戦期はまだ少年であったヴェルコールは戦争の実際を何も知らずに過ごしていた。しかし、青年となった彼は、この戦争が如何なるものだったかを次第に理解するようになる。彼は戦間期のヨーロッパ国際政治、特に仏独関係について、仏独両国民の親睦を阻んでいるのは、第一次世界大戦の敗戦国ドイツに対するフランスの強硬な態度であると理解している。敗戦により国力を大きく損なったドイツに対して、フランスが友好的に接していたならば、ヒトラーのような独裁者は登場しなかったのだと考えていた。その他の点についても、彼は左派的な思想をもち、フランス政府の外交・軍事戦略に批判的であった。例えば、フランスの政治家には卓越した外交手腕を持った者がいなかったとするが、「ただ一つの例外として」協調外交路線を採ったアリスティード・ブリアン (Aristide Briand) を挙げている。また、第二次世界大戦開戦直後、ドイツ軍がマジノ線を突破したことについても、ドイツ軍の行動は容易に想像できるはずだったとも語っている²⁶⁾。

抵抗文学作家への道

1938年、ヴェルコールは「国際ペン」のフランス支部へ入会したことをきっかけに、作家としての第一歩を踏み出した。国際ペンは、第一次世界大戦後の1921年、戦争の惨禍を再び繰り返

返さないために、作家・文筆家が表現の自由を守るべく国境を越えた協力を行うことを目的としてイギリスで設立された団体である。それゆえ、ナチス・ドイツによる他国への軍事侵攻やユダヤ人迫害が激化していたこの頃は、国際ペンはナチズムに反抗するために国際平和・人民および民族間の平等を掲げ、表現の自由を守るための活動を行っていた。この国際ペンで、彼は著名な作家たちと交流をもった。

1939年に第二次世界大戦が勃発した際には、ヴェルコールは歩兵予備隊の兵士として国境地帯に駐屯していたが、事故で負傷してパリ郊外へ戻っていた。回復して帰営した先で、彼はパリ陥落のニュースを聞いた。ヴェルコールは、一度はド・ゴール（Charles de Gaulle）将軍の呼びかけに反応しイギリスへ向かうことを検討したが、所属する師団長の許可を得られずフランスにとどまることになった。

パリが陥落すると、かつて仏独協調の夢を抱いていたヴェルコールも、愛国心を傷つけられドイツやドイツ人を受け入れる気持ちを失ってしまった。彼は「これからさきどうやって生きてゆくか自分でもわからなかった」が、「ナチスの軍隊がフランスを支配し、隷属化しているかぎり、私がデッサンをえがきつづけることはありえなかった」と回想している²⁷⁾。友人の影響もあり、ヴェルコールは絵での表現ではなく、小説の執筆を行いたいと強く願うようになった。だが、前述したような検閲制度が存在したために、反独派知識人は表現手段を失い、沈黙するほかなかったのである。当時のメディアは、フランス全体が「自分たちを征服した者へ完全に服従し、敗戦の罰を神に感謝し、また感謝をこめ、むしろ喜悅にひたりながら敵に服従を誓っている」²⁸⁾かのように報道を行っていた。

しかし、1940年11月11日の学生による反独デモ行進を皮切りに、パリでレジスタンス行為が散発的に見られるようになっていた。さらに、レジスタンスのパンフレット『パンタグリュエル（Pantagruel）』が刊行されたことがヴェルコールを勇気づけた。彼はフランスの知識人として、フランスの自由と文化を如何に守るべきか思案し続けていた。だが、刊行物を出したとしても、いかにして監視の目をかいくぐって人々に広めるのかという大きな課題が残されていた。先に紹介した『自由思想』も、機構と人員の面であまりに大規模な冊子であったために秘密が漏洩され、発行人は逮捕されていたのである。そこで、ヴェルコールは他の作家と共に出版するのではなく、自らの作品を彼自身の組織によって発行する計画を開始した。

深夜叢書の設立

かくして1942年に設立されたのが『深夜叢書』である。この時、かつて駐屯していた国境地帯の山岳の名をとり、「ヴェルコール」というペンネームがつけられた。深夜叢書の宣言文は以下の言葉で結ばれている。

以下が『深夜出版』の目的である。〈宣伝はわれわれの仕事の領域ではない。われわれの意図は、われわれの精神生活をまもり、自由にわれわれの芸術に奉仕することにある。著名度

などは問題ではない。もはや個人的な名声のごとき些事はどうでもよろしい。また、その使命の困難さも問題外である。重要なことは、人間としての精神的純粋さである。}>²⁹⁾

深夜叢書はヴィシー政権およびナチス・ドイツへの抵抗の手段として設立されたものであったが、その第一の使命は「思想の中立性を守ること」³⁰⁾、すなわち政権による表現・思想の自由の恣意的な抑制に抗議することだった。また、フランス全体があたかもドイツにすすんで服従しているかのように報道されていることも否定して、政権とは関係なく「人間としての精神的純粋さ」を守るためにペンをとって闘う作家がなおフランスにいることを示すものであった。

深夜叢書の第一作目となったヴェルコールの『海の沈黙』は、彼の友人で協力者であるピエール・ド・レスキュール（Pierre de Lescure）経由で、文学界・財界・法曹界・大学人などに配布され、そこから人の手から手へと広められた。その後、深夜叢書からはルイ・アラゴンの『グレヴァン博物館』、フランソワ・モーリャック（François Mauriac）の『黒い手帖』、詩集『詩人たちの名誉』などが出版された。これらの作品は、民衆に広く親しまれた。深夜叢書は民衆の共感を呼び、反独・反ヴィシー的雰囲気を高めることに貢献した³¹⁾。

(3) 知識人と自由フランス、戦後の平和：ルネ・カサン

戦間期の活動

ルネ・カサンは、フランス生まれのユダヤ人で、リール大学およびパリ大学法学部の教授であった。世界人権宣言の起草者の一人として1968年にノーベル平和賞を受賞したことで広く知られている。「生粋の共和派」³²⁾である彼は、1924年のエリオ左派連合内閣の成立にも陰ながら貢献した人物であった。

カサンは戦間期の反戦運動には参加していなかったが、法学者として国際法・国際政治の現場で平和の創造に関わった。例えば、1925年には国際退役軍人組織のフランス支部（l'Association Républicaine des Anciens Combattants : l'ARAC）を設立した³³⁾。カサン自身、第一次世界大戦に徴兵され、銃撃戦で負傷して退役軍人となった人物であった。さらに、1924年から大戦直前の38年まで国際連盟にフランス代表として参加し、国際連盟規約や1928年の不戦条約による国際紛争の平和的解決制度の確立にも助力している³⁴⁾。

自由フランスへの参加

1940年6月、新たに成立したベタン政権がドイツとの休戦交渉を始めたことを知り、抗戦派のカサンは落胆していた。その時、友人からド・ゴールがロンドンで対独戦続行を訴えていると聞かされ、ド・ゴールのレジスタンス組織「自由フランス」に参加することを決意しロンドンへ渡航した³⁵⁾。カサンは、「フランスの名誉を守るため、フランス帝国を防衛するため、フランスを解放するため、そしてフランスの人々に自由を取り戻させるため」³⁶⁾に在外フランス人、特にフランス軍人が結集して行動すべきだと感じたのである。以降、カサンは法律家・法学者として

の経験や知識を活かして自由フランスが政府としての性格を得ることに貢献した。ド・ゴールはカサンについて以下のように回想している。

それでも、幾人かはただちに私のかたわらにきて、彼らがだしぬけに引き受けることになった義務のために熱意と活動をもたらしたのであり、そしてそのおかげで、いろいろと困難があったにもかかわらず、船は出帆し、そして大海のただなかに浮かんたのである。カッサン教授は、すべての政令・文書にかんして私の協力者——なんと貴重な！——となった。それらの政令・文書にもとづいて、われわれの内外の構造は無から出発して樹立されたのである³⁷⁾。

自由フランスが設置されて間もなく、ド・ゴールはいくつかの部局を設置して業務にあたった。民間業務部門として市民局・経済局・法務局・新聞情報局などが設けられ、カサンは法務局の責任者を務めることになった。その後 1940 年 10 月、ド・ゴールは「植民地帝国防衛評議会 (Conseil de defense de l'Empire : CDE)」を設置した。CDE の任務は「フランスに対する忠誠を維持し、内外の安全に注意し、経済活動を指導し、植民地諸領土住民の精神的結集を守ること」³⁸⁾とされていることから、CDE は不完全ながらも政府としての役割を持っていたと言える。さらに翌年 9 月、「フランス国民委員会 (Comité national français : CNF)」が設けられ、委員会はフランス国民の代表機関として条例を決定する役割を担った。同時に、CNF により広汎な世論を反映させるための「諮問議会」も新たにつくられた。カサンは CNF でも司法・公共教育担当委員を務めている³⁹⁾。

また、カサンは自由フランスの対ソ連外交でも重要な役割を果たしている。1941 年 6 月に独ソ戦が開始すると、ド・ゴールは「フランス国民はロシア国民に味方してドイツと戦う」こと、「モスクワと軍事関係を定めておきたいと思う」ことを表明した。そこで、ロンドンに駐在していた CNF 委員のカサンたちに対し、在ロンドンソ連大使に面会してソ連との交渉にあたるよう命じた。その結果、ソ連はド・ゴールを「全自由フランス国民の首長」として承認した⁴⁰⁾。

さらに、カサンは自由フランスとの関連で「世界イスラエル連盟 (Alliance Israélite Universelle : AIU)」の理事長にも就任した。AIU は、1860 年にフランス在住ユダヤ人によって設立された組織で、ユダヤ人を含む子供たちにフランス語での教育を行う学校を運営していた。カサンはユダヤ人として 1942 年に AIU の機関を訪問するなどの活動を行っており、その翌年、ド・ゴールはカサンに AIU の理事長となるよう依頼した。この理由として、ド・ゴールが、シリア・レバノン・パレスチナなど北アフリカにある AIU 学校と自由フランスとのつながりを密にすることで、それらの土地における自由フランスの利権をイギリスから守ることが出来ると考えていたことが挙げられる。また、フランス国民委員会等自由フランスの組織において、法務・教育関係の任務に就いていたカサンは AIU の理事長として適任であったのである。こうしてカサンは AIU の理事長に就任し、またド・ゴールの北アフリカにおける自由フランスの指導者としての地位はより強固なものになった⁴¹⁾。

戦後国際秩序の創造

このように自由フランスは知識人の協力を得ながら軍事的・政治的に国家としての性格を強めた。そして次にド・ゴールは「レジスタンスは私の指揮下の《自由フランス軍》に統合されなければならない」として、国内のレジスタンス運動を自由フランスの下に結集させることを目指した。そのためにまず、自由フランスは、より広範なフランス人を結集するという意志を示し、「戦うフランス」に呼称を変更した。

レジスタンス統一の任務を中心となって担ったのは、自由フランスの内部部門「中央情報行動局 (Bureau central de renseignement et d'action : BCRA)」である。BCRAは情報収集、国内レジスタンスの支援に加え、多様なレジスタンス組織の統一にもあたった。自由フランスは、イギリスとの協定に基づいて得た財源で国内レジスタンスに物質的・金銭的援助を行って、国内レジスタンスへの財政的影響力を増大させることを可能にしたのである。1943年、南部の三大レジスタンス組織（「南部解放 (Libération-Sud)」 「義勇兵 (Franc-Tireur)」 「コンバ (Combat)」) を「統一レジスタンス運動」にまとめることに成功した。これをうけて同年5月、全国抵抗評議会 (Conseil national de la Résistance : CNR) が設立された。CNRには北部の5大レジスタンス組織（「軍民統一戦線 (Organisation civile et militaire : OCM)」 「北部解放 (Libération-Nord : LN)」 「国民戦線 (Le Front national de lute pour l'indépendance de la France : FN)」 「抵抗者 (Ceux de la Résistance : CDLR)」 「解放者 (Ceux de la libération : CDLL)」)、南部の3大組織、6つの政党（共産党・社会党・急進社会党・人民民主党・民主同盟・共和連盟）の代表が集まり、ド・ゴールを首班とする臨時政府を樹立すること、およびド・ゴールがレジスタンス運動の唯一の指導者であることを確認した。これ以後、自由フランスはレジスタンス運動体のみならず、戦後フランスにおける政治・外交体制への準備機構としての性格をも強めることとなる⁴²⁾。

自由フランスの戦後構想は、CNR設立の約1年半前から既に始まっていた。1941年8月に大西洋憲章が発表されたことをうけ、同年12月ド・ゴールは「戦後問題を研究するための委員会 (Commission pour l'étude des problèmes d'après-guerre : CEPAG)」を設置した。カサンはCEPAGの内部委員会の一つ、司法問題を扱う委員会の委員長に就任し、国政改革・教育・国際的な法律問題の3つの分野に取り組んだ⁴³⁾。彼が強調したのは、第一次世界大戦後のパリ講和会議の失敗を繰り返してはならないということである。その「失敗」とは、講和条約にフランスの死活的利益を反映できなかったこと、また、国際連盟にもフランスの構想が必ずしも採用されていなかったことであった。そのため、今回は熟慮を重ねた上で講和会議に臨めるように早くから準備をしなければならないと考えていた⁴⁴⁾。

さらに、第二次世界大戦終結後、カサンは新たな国際法制度の設立に携わった。戦後の国際社会では、大戦中にナチス・ドイツによって行われた大規模な人権侵害を顧みて、国際的な人権保障が世界平和の維持にとって不可欠であると考えられるようになった。国際人権法の嚆矢となったのが1948年の世界人権宣言である。世界人権宣言はそれ自体としては法的拘束力を持たないが、その規定の一部は国際慣習法化して、それ以降の国際人権諸条約および各国内法の基礎を成

した。世界人権宣言は、「人類社会のすべての構成員の固有の尊厳と平等で譲ることのできない権利とを承認することは、世界における自由、正義及び平和の基礎である」ことを認め、すべての人が「思想、良心及び宗教の自由」および「意見及び表現の自由」に対する権利を有することを明言している。特に第19条では、表現の自由について「干渉を受けることなく自己の意見をもつ自由並びにあらゆる手段により、また、国境を越えると否とにかかわらず、情報及び思想を求め、受け、及び伝える自由を含む」とされている⁴⁵⁾。このように、思想・表現の自由を重視した宣言文が、レジスタンス運動に参加していたカサンによって起草されたという事実は注目に値する。

(4) レジスタンス運動における知識人の「反ファシズム」イデオロギー

ヴィシー政権期のフランスでは、国内・国外の両方において知識人がレジスタンス運動に関わっていた。それぞれが置かれた立場は異なっていたが、以上の2人をはじめレジスタンス知識人の間に共通していたのは、政権の恣意的な抑制から個人の思想および表現の自由を守らなければならないと感じていたということ、さらに、フランスが体現する自由の精神や文化をナチス・ドイツの脅威から守るために闘い続けなければならないと考えていたことである。その「闘い」とは、武力的な「戦い」と精神的な「闘い」の両者を含んでいた。この事実と、戦間期の反戦運動においてフランス知識人が大規模な人権侵害が行われているナチス・ドイツを危険視し、表現・思想の自由や文化の擁護を重視する「反ファシズム」イデオロギーを形成したこととの間には連続性が見られる。すなわち、戦間期から第二次世界大戦期にかけて、フランス知識人の間では文化や自由の擁護が行われる状況こそ「平和」なのだという視点が共有され続けていたと言える。

4. おわりに

戦間期および第二次世界大戦期のフランス政治・外交史は、ナチス・ドイツとの関係を抜きにしては語ることが出来ない。特に第二次世界大戦期のフランスは、国内に置かれたナチス・ドイツの傀儡政権と、国外に誕生した自由フランスという「政府」が同時に存在していたという点で特殊な状態であった。この特異な状態を抜け出し、フランスの独立と名誉を回復させる過程に参加したのは著名な政治家や権力者のみならず、一般市民としての知識人が大きく貢献したことを忘れてはならない。彼らが有していた感覚や思想が、政治と国民のそれぞれに影響を与えながら、新たなフランスを生み出すことに繋がったのである。

また、当時のフランス知識人たちの中では「反ファシズム」という新たなイデオロギーが形成され、彼らの行動の指針となっていたことを指摘しておきたい。文化の擁護および思想・意見・表現の自由こそ平和の重要な要素であるとするこのイデオロギーは、戦間期の国際反戦運動を通じて生まれ、第二次世界大戦期のレジスタンス運動そして戦後の国際秩序へと継承され続けた。第二次世界大戦初期のレジスタンス派知識人が対独抗戦を主張していたことは、平和主義としての「反ファシズム」に一見反しているようではあるが、「個」を守る伝統、表現や思想の自

由といったフランスのエスプリとも呼ぶべきものを、ナチス・ドイツの脅威から防衛しなければならないという知識人の義務感に注目すると、やはり「反ファシズム」が一貫して守られていることが分かる。言い換えれば、戦間期および第二次世界大戦期の「反ファシズム」イデオロギーは、文化と自由のために闘うフランス知識人たちの愛国心から生まれたものだったのである。

注

- 1) 定冠詞と大文字がついた「la Résistance」という語は、フランスの第二次世界大戦期対ヴィシー・対独抵抗運動に対してのみ用いられ、その他のヨーロッパ諸国におけるレジスタンス運動については大文字を外してははっきり区別される。亀谷百合佳「第二次大戦における「抵抗」の呼称をめぐる比較考察——日本とフランスを中心に——」(『立命館言語文化研究』、10巻5・6号、1999年、227-244ページ)。
- 2) ジュリアン・バンダ(宇京頼三訳)『知識人の裏切り』(未來社、2015年)、146-147ページ。
- 3) 同上、149ページ。
- 4) ミシェル・ヴィノック(塚原史・立花英裕・築山和也・久保昭博訳)『知識人の時代：パレス／ジッド／サルトル』(紀伊國屋書店、2007年)、448ページ。
- 5) エドワード・W・サイード(大橋洋一訳)『知識人とは何か』(平凡社ライブラリー、2004年)、37ページ。
- 6) 同上、54ページ。
- 7) 反ファシズム知識人監視委員会のリーダーであったポール・リヴェは、知識人とは「公衆の気付かぬところで、自らの探求、作品、教育に心を奪われている」ものであり、「夢の中にとじこもる」彼らが社会運動に参加するには労働階級との連携が不可欠と考えていた。吉原功「反ファシズム知識人監視委員会における『知識人』」(『明治学院論叢』235号、1976年、1-28ページ)。
- 8) 渡辺淳『二十世紀のフランス知識人』(集英社新書、2004年)、14-15ページ。
- 9) J.P.ベルナル(杉村昌昭訳)『フランス共産党と作家・知識人：1920年～30年代の政治と文学』(柘植書房、1979年)、92ページ。
- 10) 海原峻『フランス人民戦線：統一の論理と倫理』(中公新書、1967年)。
- 11) ねず・まさし「アムステルダム世界反戦大会——統一戦線の国際的な最初の経験——」(『現代と思想』25号、1976年)、176ページ。
- 12) 海原峻、前掲書、63ページ。
- 13) 同上、67-68ページ。
- 14) 吉原功、前掲論文。
- 15) アンドレ・ジッド、ルイ・アラゴン、アンドレ・マルロー他(相磯佳正、石黒英男、五十嵐敏夫、高橋治男訳)『文化の擁護——1935年パリ国際作家大会』(法政大学出版局、1997年)。
- 16) 齊藤孝『戦間期国際政治史』(岩波現代文庫、2015年)、220-222ページ。
- 17) アンドレ・マルロー(山口三夫訳)「序」『精神の独立：ジャン・ゲーノ＝ロマン・ロラン往復書簡』(みすず書房、1982年)、7ページ。
- 18) David James Fisher, "Malraux: Left Politics and Anti-Fascism in the 1930's", *Twentieth Century Literature*, Vol. 24, No. 3, pp. 290-302.
- 19) 渡辺和行・南充彦・森本哲郎『現代フランス政治史』(ナカニシヤ出版、1997年)、87-88ページ。

- 20) 渡辺和行『ナチ占領下のフランス ― 沈黙・抵抗・協力』（講談社選書メチエ、1994年）、77-78ページ。
- 21) 同上、116-119ページ。
- 22) J.=P. サルトル（佐藤朔ほか訳）『シチュアションⅢ』（人文書院、1962年）、11ページ。
- 23) 安原伸一郎「紙の争奪戦 ― ナチス占領下のフランスにおける検閲と作家の文筆活動」（『言語情報科学』4号、2006年、339-355ページ）
- 24) 当時の駐仏ドイツ大使であったオットー・アベッツ（Otto Abetz）は、「フランスには三つの権力がある。共産主義、大銀行、そして『新フランス評論』である」と言ったとされている。Herbert Lottman, *The Left Bank: Writers, Artists, and Politics from the Popular Front to the Cold War*, The University of Chicago Press, 1998, p. 141.
- 25) J.=F. ミュラシオル、前掲書、95ページ。
- 26) ヴェルコール（森乾訳）『沈黙のたたかい：フランス・レジスタンスの記録』（新評論、1992年）、21-33ページ。
- 27) 同上、86-87ページ。
- 28) 同上、141ページ。
- 29) 同上、190ページ。
- 30) 同上、188ページ。
- 31) 渡辺和行、前掲書、194ページ。
- 32) J.=F. ミュラシオル、前掲書、22ページ。
- 33) Gérard Israël, René Cassin (1887-1976): *La guerre hors-la-loi, Avec de Gaulle, Les droits de l'homme*, Nemesis, 2007, p. 47.
- 34) Ibid., pp. 52-60.
- 35) Ibid., pp. 99-102.
- 36) René Cassin, "Vichy or Free France?", *Foreign Affairs*, Vol. 20, No. 1, pp. 102-112.
- 37) ド・ゴール、前掲書、81ページ。
- 38) 同上、202ページ。
- 39) アンリ・ミシェル、前掲書、35-37ページ。
- 40) ド・ゴール（村上光彦、山崎庸一郎訳）『ド・ゴール大戦回顧録Ⅱ 呼びかけ：1940-1942』（みすず書房、1999年）、12-13ページ。
- 41) Jay Winter, "René Cassin and the Alliance Israélite Universelle", *Modern Judaism*, Vol. 32, No. 1, 2012, pp. 1-21.
- 42) 渡辺和行・南充彦・森本哲郎、前掲書、143-144ページ。
- 43) 宮下雄一郎『フランス再興と国際秩序の構想：第二次世界大戦期の政治と外交』（勁草書房、2016年）、119-121ページ。
- 44) 同上、156ページ。
- 45) 日本、外務省、「世界人権宣言（仮訳文）」〔http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/udhr/1b_001.html、http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/udhr/1b_002.html〕（最終検索日：2016年10月27日）

